

## 吉野復興副大臣のぶら下がり会見録

(平成30年3月18日(日)15:40～15:48)

於) (仮称) 釜石鵜住居復興スタジアム)

### 1. 発言要旨

今日は、釜石市を訪問させていただきました。まず、釜石市民ホール「T E T T O (テット)」、これは、鉄の都をもじった名前だそうですが、そのT E T T Oを伺いました、

そこでは、まず入ってみると、ホールで市民コンサートが開かれていまして、多くの市民の方々が釜石出身のピアニストの演奏を聴いておりました。

また、小劇団のメンバーともお会いをしまして、それぞれお仕事を持っている中で劇団を結成して、「釜んライダー」という、仮面ライダーをもじったものと思いますけど、そういう手作りの活動をして、復興している姿を拝見させていただきました。

続いて、釜石港に参りまして、岩手県で初めてというコンテナ輸送のガントリークレーンを拝見させていただきました。

岩手県では、この釜石港が初めてのガントリークレーンだそうで、定期航路も上海、釜山、寧波へ運行されていると、伺いました。

SOLAS条約できちんとバリケードがあるわけでありまして、きちんとアメリカへも行き来できる、そういう施設を見てきたところです。

最後に、ここ「釜石鵜住居復興スタジアム」、これは2019年ラグビーワールドカップが開かれるところでございます。今年8月をめどに完成される予定でございますので、この釜石から世界に向けたラグビーワールドカップが開かれます。ここにおられる石山さんは新日鉄釜石のV7のメンバーでございますが、石山さんの熱い思い、ここでワールドカップを開きたいというその思いが今、実現したという、本当に胸の熱くなるお話を伺わせていただいて、V7のメンバーであるとともに、熱いこのふるさと釜石に対する思いを聞かせて、感動をしたところです。

以上です。

### 2. 質疑応答

(問) ラグビーワールドカップの会場になるスタジアムを視察されたわけなんですけれども、雑駁なとか、ぼんやりした質問になるかもしれないんですけれども、盛り上げですとかいろんな諸準備、これからあると思うんですけれども、復興庁としてはそういった動きをどのようにサポートしていきたいという思いがありますでしょうか。

(答) まずは、市長さんとともに、地元の皆さんとともに、どういう形でワールドカップを盛り上げていくか、そこへどういう支援ができるか、支援をすることは間違いございませんので、きちんと市長さんとお話ししながら、バックアップをしていきたい、このように考えています。

(問) 震災復興の全体のお話なんですけれども、8年目の復興に入ります。被災地ですと、例えば、生業の再生ですとか、人口減ですとか、そういった課題が出てきていると思うんですけれども、復興8年目の課題感と、それに対してどのように取り組んでいかれるかをお願いします。

(答) 7年が経ちまして、8年目に入っております。復興はかなり進んでおりますけど、進んでいる復興の各々のステージにおいても、新たな課題というのは必ず出てまいります。

今日も市長さんから要望を受け止めましたので、帰ってからきちんとそれを精査して、きちんと支援をしていきたい、このように考えています。

(問) ここでラグビーワールドカップが来年開かれるんですけれども、どのような大会になってほしいとか、大会への期待というか、その辺をどのようにお考えでしょうか。

(答) 実は、フィジーがここで行われる試合の中に入っております。島嶼国ということで、5月に福島県いわき市で島サミットが開かれます。大統領ご夫妻が来られ、総理ご夫妻が来られ、3年ぶりの島サミットが行われます。そういう意味では、そういうフィジーの国がここでラグビーの試合がされるということは、本当に嬉しいことだなというふうに思っています。

(問) 大臣にとっての身近な国というか、そういう感じですか。

(答) そうですね。3年前もいわきで行いましたので。

(問) 被災地の住んでいる方からすると、やはり毎年言われていることではあるんですけれども、「風化」ということがかなり心配するところでありまして、それをずっと寄り添っていくというようなどころについての、大臣の思いの部分をお願いします。

(答) 実は、今年4月、来月から私の孫が小学1年生になるんです。でも、7年前のあの日は、私の孫はおなかの中にいたんです。

ですから、孫にとってはもうあの東日本大震災、我々忘れようとしても絶対死ぬまで忘れることのできないあの光景を、私の孫は歴史上の出来事としか学ぶことができないんですね。

正に風化、きちんとこの震災の教訓というものを、我々は後世の方々に伝えていかねばならないという大きな役割、必ず災害はやってきます。災害は必ず起こるんです。それを防災・減災を含めて、いかにやってくる災害に対して被害を最小限にするための

我々が経験した教訓というものを、きちんと後世に残していくこと、これが一番大事な事なのかなというふうに今つくづく感じています。

(以 上)